「日向御前国姫物語」

上野　日向

徳川家康のひ孫であり、織田信長の血も引くという華麗な血統に生まれた「国姫」。本動画の講談「日向御前 国姫物語」を視聴するまで、私は彼女の存在を知らなかった。しかし、激動の時代に翻弄されながらも、自らの意志で道を切り開き、有馬家を救った彼女の生涯を知り、その強さと生き様に深く感銘を受けた。特に強く印象に残ったのは、国姫の持つ聡明さと、自らの運命に対する圧倒的な「覚悟」である。天下人である家康に溺愛されて育った彼女だが、周囲に流されることなく、わずか 4 万石の小大名である有馬直純のもとへ輿入れすることを自ら決断する。当時、キリシタン問題や海外勢力の動向で緊迫していた肥前の国へ赴く際、彼女は「家康公に現地の状況を伝え、有馬家を守る」と誓ったという。嫁ぐ前に片手に聖書、もう片手にお経を持って猛勉強したというエピソードからは、単に守られるだけのお姫様ではなく、自らの知性と行動力で大切な人々を守ろうとする、現代にも通じる自立した女性像が見えてきて非常に惹きつけられた。その後、有馬家にはお家潰しの危機や、家臣との対立など幾度もの試練が訪れる。しかし、その度に国姫の存在と、彼女が紡いだ徳川家との絆が有馬家を救う決定打となっていく。日向延岡へ移り住んだ後には、女人禁制だった山へ馬で駆け登り、女性の参拝を解禁させたという。このお転婆とも言える大胆で真っ直ぐな行動力があったからこそ、彼女は「日向御前」として多くの領民に心から慕われたのだろう。国姫の没後も、有馬家は彼女が遺した「家康公を祀り、本多氏との絆を大切にせよ」という教えを守り抜いた。その結果、最終的に福井の丸岡城へと導かれ、幕末まで平和にこの地を治めることになる。丸岡にはかつて国の礎を築いた振姫がいたが、同じように有馬家を丸岡へ導いた国姫もまた「国を救った姫」であるという結びには、歴史の不思議な巡り合わせとロマンを感じずにはいられなかった。¥講談ならではのテンポの良い語りと張り扇の響きによって、一人の女性が命を懸けて繋いだ歴史のバトンが、今も丸岡の地に息づいていることをリアルに実感させられた。